

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第十四回 V・F・アルミニオン 『イタリア使節の幕末見聞記』（前編）

「日本人は大工仕事が上手で、その作業はまことに見事である」「世界中のどこを探しても、日本の農夫ほどに自分の田畑の耕作に精を出す者はいない」

ペリー来航以来、アメリカ、イギリス、フランスなど、西洋諸国が次々と日本との通商条約を結ぶ中、遅ればせながら日本にやってきた国にイタリアがありました。当時のイタリアは、西洋諸国の中では造船技術に劣っており、極東地域まで航海可能な船舶は軍艦のみで、通商は商船ではなく軍艦を使用していました。

イタリアが日本との通商を結びたかった最大の理由は、蚕の卵の輸入にありました。一八六〇年前後のヨーロッパでは、

悪疫が発生し、イタリアやフランスの養蚕業はパニック状態に陥り、特に絹産業が主体の北イタリアは大打撃を蒙りました。その一方で、イギリスやフランスの商船は中国や日本と通商条約を結び、蚕卵紙を輸入して多大な利益をあげていました。そこでイタリアは特に評判の良かった日本の蚕卵紙を輸入するため、日本との通商条約締結に軍艦マジエンダ号を派遣します。

その艦長がアルミニオンで、彼はイタ

リア使節として慶応二年（一八六六）に来日。幕府と根気強く交渉を重ね、国交を結びます。これを機にイタリア商人達は、日本の蚕卵紙の仕入れが可能になり、イタリア絹産業は徐々に回復します。

彼はイタリアに帰国後の一八六九年にこの幕末見聞記を出版します。これまでとり立てて言及してきませんでした。この連載で紹介した外国人達は、ザビエルやケンペルなど過去数百年間に日本にきた先人達が残した日本事情・日本観をよく学んだ上で来日していました。アルミニオンも同様に相当の事前学習をして来たのですが、それでも日本の風景、生活様式、生活必需品、手仕事、日本人の精神性などに非常に感銘を受けたことがこの本を読むとよく分かります。

では、彼が感銘を受けたことについて、少し細かく見ていきましょう。

まず彼は、日本の中にある様々な美しさに魅了されます。

日本の風景においては、江戸に行く途中で寄港した下田で、こんなことを言っています。

「夜が明け始めると、われわれは投錨地周辺の光景を心ゆくまで眺めることができました。夜明けの光が差し始めていて、言葉に尽くせないほど見事な眺めだった。

西のほうには、一筋の小川の流れている小さな谷あいがあり、人家も見える。どの家も、見たところは質素だが、気のきいた形のよい作りで、海岸沿いにまっすぐに並んでいる。また、その方角にある幾つかの丘は、見事に耕された畑に覆われ、段々に低くなって平地に届くと、そこは一面の水田である」

夜明けとともに目の前に広がる美しい風景に魅了されたことが、まるで詩人が歌うが如く描写されています。

また陶磁器などの器の美しさについても、

「陶土は極めて良質で、できればの見事さは、ヨーロッパの最良の品にもしばしば匹敵する。器は大小さまざまで、その形は独創的、かつ優美であり、色彩も称賛に値する」

「もっとも貴重な産品の一つは漆器である。これは主に大坂で作られ、時に途方もなく値の張るものもある。日本の漆は極めて美しい一種のワニスで、湿気や熱湯に強い」

と、その価値を認めています。

そして他にも、

「小さな姫籠笥ほど優美なものはない。これには小さな引き出しがたくさんついていて、婦人たちは大切な品をしまっておくのである。これに劣らず貴重で見事な品に嵌木細工の小箱がある。形や大き

さはさまざまで、やはり美しく塗られており、手袋、化粧品などをしまうのに用いられる」

と、箆笥について評したり、

「日本人は、銅に見事な焼き入れをすることに長けていて、ダマスカスやトレドの刀を思い起こさせるような刀を作る」

と、日本刀について語ったり、

「他の店では、見事な盆栽に目を奪われる。それらは季節に応じて花をつける。盆栽の大きさは小机ほどもなく、そこに一尺にも足りない椀の木などが植えられている」

と、盆栽について語ったり、仕舞いには日本の船の姿の美しさについてまで、

「大君の蒸気船二隻と軍用和船数隻が、砲台の手前、わが艦の投錨地の西側に停泊していた。これらの船は、実践の役に立つとはまず思えないが、姿はまことに優美で、精密な技術で建造されていた」と語り、それぞれの物の美しさを好意的に見ています。



さらには、人々の仕事に対する姿勢から日本人の内面の美しさについても書き残しています。

大工について、

「日本人は大工仕事が上手で、その作業はまことに見事である」

と、日本家屋の建築の様子と、障子や襖、雨戸などの機能を見て語ったり、農家を見ては、

「世界中のどこを探しても、日本の農夫ほどに自分の田畑の耕作に精を出す者はいない。彼らが田畑を耕す時の熟練、勤勉、そして入念さはまことに称賛に値する」

と、庶民が仕事に対して真面目で手を抜かない性格であると書いています。

また庶民だけでなく横浜の税関で働く役人についても、中国政府は税関管理者に西洋人を用いて、自らはあまり労せず税を徴収していることと比較してこう述べています。

「日本政府は、中国の政府と異なり、税関の管理者に西洋人を用いない。……この方法(※中国政府のやり方)は、勤勉で、しかも自己の権益に敏感な日本人には適しない。……領事は、船舶到着から二十四時間以内に積荷目録を提出する。数多くの日本人役人が港に向き、密貿易が行われていないことを確認する。彼らは船舶内に立ち入り、いかなる検査にも手を抜くことはない」

日本人が仕事に対して責任感があり、不正を嫌い、大切なことは他人任せにしない性格であることを、アルミニウムはよく捉えていました。